

■ 期末考査に向けて

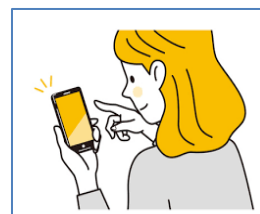
11月30日(火)から12月2日(木)にかけて、2学期期末考査が実施されます。考査まで2週間を切りましたが、しっかりと計画を立て、準備をしていくようにしましょう。

今年度は、特進コースの3年生も「指定校制」や「公募制」といった学校推薦型入試で国公立大学や私立大学に出願している生徒が多数いますが、どのコースであろうと、学校推薦型入試を希望する者は評定平均値が基準を満たしているかが、志望校決定に向けてのポイントになります。普段の授業を大切に、悔いの残らないように学習に取り組んでほしいものです。



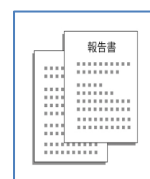
■ classi の確認を！

コロナ禍ということもあり、今年度はなかなか学年集会を開くことができず、進路担当から進路関係の情報を学年全体に周知する機会がありません。そこで、進路関係についてもclassiを活用して情報提供しているのですが、きちんと確認していない生徒諸君も多いようです。進学・就職を問わず、大事な情報を流しているつもりですので、きちんと確認することを徹底してほしいと思います。今年度も含めて、例年多く見られることとして、東日本国際大学やいわき短期大学を希望する者で、受験料を払ってしまった(※次年度以降、変更もあり得ますが、本校生は東日本国際大学およびいわき短期大学の受験料は不要です)、「奨学金申請書」を提出し忘れたりすることが挙げられます(※「奨学金申請書」を提出していただいたうえで、本校生は少なくとも入学金が免除になります)。ご承知おきください。



■ 受験報告書の提出を！

3年生諸君には大学・短大・専門学校等への進学、就職を問わず、受験終了後、「受験報告書」を提出してもらっています。細かく書いて提出してくれる生徒も多く、次年度以降、後輩諸君にとって良い資料になるものと思われれます。先輩方も細かく書いてくれた人もいれば、そうでない人もいました。ある3年生は、「自分の志望校については、あまり良い資料がなかったので、しっかり書いておきました」と言って提出していきました。その心意気に感謝します。受験報告は記憶が新しいうちに記入して提出するようにしましょう。



■ 日本学生支援機構・奨学金の結果通知について

3年生で日本学生支援機構・奨学金の予約採用を申し込んだ者のうち、6月に提出した人は11月中に結果通知が届くものと思われれます。ただし、マイナンバーをはじめ、何らかの書類の不備があったりすると、12月以降に回される可能性があるとのこと。なお、結果が届き次第、順次該当生徒に配付します。

■新聞の「進学特集」から

10月17日（日）の読売新聞に掲載された「2022進学特集」から、日本テレビアナウンサーの滝菜月さんの記事を全文引用しましたので、参考にしてみてください。新聞のタイトルには、「準備にベスト尽くしてこそ後悔ない結果に」とありました。「準備にベストを尽くす」ということは、大学受験だけでなく、日常のさまざまな場面で大切になっていくことでしょう。



農業と酪農が盛んな北海道音更町出身。「小学校の周りは360度、畑」という自然豊かな環境で育った。小学校の校庭に水をまいて作られたリンクでスケートを楽しむなど、冬でも雪焼けするほど外遊びが好きな少女だった。

2人の兄に続き、小学校の剣道クラブに入ったところ兄と違って全く勝てない。負けず嫌いな性格のため「お兄ちゃんに勝てるものが欲しい」と、学習塾で算数の勉強を頑張った。難解な問題でも、一つの答えにたどり着くのが面白く、小学校のうちに高校数学まで到達した。

アナウンサーになる夢を抱いたのは、中学2年生の時。隣の帯広市出身で「テレビで見ない日はない」ほど活躍する安住紳一郎アナウンサーに憧れた。各界の著名人と上手にコミュニケーションを取り、番組を進行する姿が輝いて見えた。

「人見知りで、田舎育ちの自分も、努力次第で活躍できるかも」と思い描くように。「東京の大学に行くには、中学から勉強を頑張り、高校は進学校に入る」と逆算して長期計画を立てた。

進学校で知られる地元の道立高校に入ったが、両親に東京への大学進学を反対された。3人きょうだいの末っ子。「東京なら国公立。浪人もやめてほしい」と言われた。東京の国公立は超難関大ばかり。「指定校推薦がある早稲田大なら、何校もの受験料がかからず、許してもらえる」。高1の1学期から成績、生活態度に気をつけながら、国公立受験の準備も進めた。

サッカー部のマネージャーとして、冬は雪が積もった氷点下のグラウンドでボール拾いなど、帰宅時にはくたくただった。でも、文武両道で頑張る友達に負けたくない。休み時間やバス通学時の15分など、隙間時間も効率的に使って、勉強する努力を重ねた。

強い憧れの一方、「アナウンサーになれるのは一握り」の厳しさも分かっていた。周りに夢を明かせずにいたが、高2のある日、サッカー部顧問の先生に話の流れで伝えられた。「推薦もきっと取れるし、アナウンサーにもなれる」。自分をよく知る先生の一言が「夢を追っていいんだ」という自信につながった。

（裏面に続く）

■ 歌手・松田聖子さんの話

どのような流れで授業中にそういった話が出てきたのかは覚えていませんが、昨年度の男子卒業生で、歌手・松田聖子さんのファンだという生徒がいました。今どき、珍しいと思いましたが、昨年のニュースの中で、「1970～1980年代など、昔の曲の歌詞が若い世代に共感されて流行している」という話があり、そういった類のものなのだろうかと感じたことを覚えています。その卒業生は、松田聖子さんの曲の中で「『赤いスイートピー』と『瑠璃色の地球』が特に気に入っている」と話していました。



松田聖子さんといえば、1980年代に3枚目のシングル「風は秋色」から26枚目の「旅立ちはフリージア」まで24曲連続でオリコン週間シングルチャート1位を獲得したという当時の記録を残すなど、ヒット曲を連発させていたイメージが強くあります。先の卒業生がお気に入りの曲として挙げていた「赤いスイートピー」は、ファンが選ぶ松田聖子さんのヒット曲ベスト5やベスト10で上位に挙げられることの多い曲です。今から40年近く前の曲ですが、決して色褪（あ）せることのない名曲だと思います。一方、地球規模で大きな問題となってきたからでしょうか、「瑠璃色の地球」については、昨年、新型コロナウイルスの感染が拡大し始めたころ、テレビ等を通じて耳にすることが多かった印象があります。この曲も1980年代に出されていますが、コロナ禍で心に響き、癒されたという人は世代を問わず少なくなかったようです。最近、かなり収束してきたとはいえ、今現在に至るまで新型コロナウイルスが大きく私たちの日常生活に影響を及ぼすことになるとは、その当時は思ってもいませんでした・・・。

今年に入って、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会初代会長を務めた森喜朗さんが、発言内容を「女性蔑視」と受け取られて辞任する事態が起きました。特に1980～1990年代にかけて、松田聖子さんは「女性の生き方」という部分においても、日本社会に一石を投じた人物だったように思われます。2000年代になってからだったかもしれませんが、「歌手・松田聖子の生き方」をテーマにした内容がNHKのドキュメンタリー番組で取り上げられたほどです。その番組では、女性作家と松田聖子さんが対談したり、その女性作家が松田聖子さんの生き方を論評したり・・・というものだったと記憶しています。松田聖子さんとしては、「何を言われようと自分の信念を貫いてきた」と話していた印象がありますが、社会的には非難されることもありました。ただ、基本的に松田聖子さんは品のある丁寧な受け答えをされる方で、それでいて明るくユニークな面もある魅力的な人物なのだろうと筆者は思っています。

さて、松田聖子さんは、昨年デビュー40周年を迎えました。コロナ禍でなければ、全国を回ってのコンサートが盛大に開催されていたのだと思いますが、全盛期のころと思われる1980年代の歌声を聞くと歌唱力の高さに圧倒されます。当時はそれが当たり前だと思って聞いていたのですが、どんな難しい曲でも自分のものにしてしまう能力の高さに改めて感心させられました。今年度の3年生のある授業（※昨年度、上述の松田聖子さんのことが話題に出た授業と同じ科目）で、昨年度の男子生徒とのやり取りを思い出し、松田聖子さんのことを知っているか聞いてみたところ、受講者数自体は少ないのですが、全員が知っていました。しかも、「古すぎる」とか「全然興味がない」などという反応はあまりなく、「嫌いではない」とか最近の髪型からか、「おでこが印象的」などと話していた生徒もおり、少なからず関心があったり、何らかのことは知っていたりするのだなと感じました。松田聖子さんは最近、テレビ出演が若干増えているように感じますし、先月には新しいアルバムをリリースするなど、これから先も前を向いて歩んでいかれようとしています。世代を問わず、多くの人に認知されていることも含めて、松田聖子さんはやはり「不世出の女性歌手」と言えるのかもしれませんが、

文責：清水聖（進路指導主事）